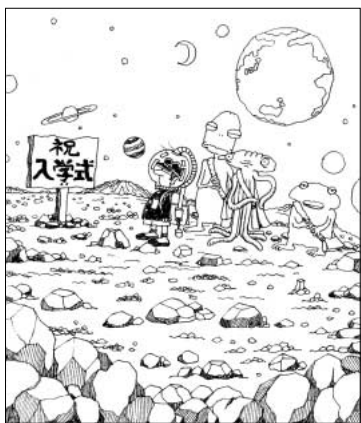


1 九月新学期制が日本を変える



国によって違う新年度の始まり

二〇〇一年度が始まった。学校は二〇〇一年度の新学期を迎え、国や公共団体も二〇〇一年度になった。多くの企業も、新入社員を迎える四月が二〇〇一年度の新年度の始まりだ。いまこそ二一世紀が本格的に起動したわけだ。年賀状を出し忘れた人は、この機会に、

「二一世紀初年度おめでとございます」という挨拶状を出したらどうだろう？

新年度の始まりには、多くの人が、希望に胸をふくらますと同時に、不安にかられる。まじめに考えすぎて、ノイローゼになる人もいるだろう。ただし、日本の多くの場所で、新年度の始まりは桜の時期に一致する。世の中が乱痴気騒ぎのお祭り気分なので、気もまぎれる。これが梅の香りに心奪われる時期だったら、物思いはこうじるだろう。誠にうまい時期に年度の始まりを設定したものだ。

ところで、新年度の始期は、人間が主体的に設定できるものである（自然条件との関係で決まる時間単位は、日と年であるが、人間が夜寝ることを考えれば、一日の始まりを朝にすることは、動かせない。なお、秒、分、時間、週、月は人為的な区切りなので、いつを始めにしても大差がない）。

事実、会計年度の始まりは、国によってまちまちである。イギリスは日本と同じだが、アメリカでは一〇月が会計年度の始まりだ。また、一月を新年度の始まりとする国もある（フランス、ドイツ、イタリア、韓国など）。他方、学年暦は九月始まりの国が多い。

昔はそうでもなかったろうが、現在のよう国際交流が活発になると、学期開始時期の差は不都合をもたらす。たとえば、日本の学校を卒業してアメリカに留学しようとしても、間があいてしまう。逆の場合にはもっと不便だ。アメリカの学校を卒業してから日本の学校に入学するまでに、九カ月も経過してしまうからである。

したがって、年度の開始時は、国際的に統一するほうが便利と思われる。大学関係者には、

「日本も欧米の大勢に合わせて九月新学期にすべきだ」との意見を持つ人が多い。しかし、歴史的な経緯や移行時の問題もあって、なかなか簡単にはゆかない。

もつとも、日本でも、昔から一貫して四月が新年度の始まりだったわけではない。会計年度は、明治の初期には一月開始の時代もあったし、一〇月や七月開始の時代もあった。現在のように四月開始となったのは、一八八六年（明治一九年）のことである。

学年暦は、明治初期には、欧米流の九月開始だった。これは、外国人教師が多かったためだといわれる。一九二一年（大正一〇年）に東京帝国大学が四月学年開始を採用するまで、大学や旧制高校は九月学年開始制だった。久米正雄の『受験生の手記』という小説に、大正初期の受験生生活が描かれているが、一高の入試は七月で、合格発表が八月になっている。

四月学年開始制は、一八八六年に高等師範学校が採用し、九二年に全国の小学校が採用した。これは、会計年度や徴兵登録期と整合性をとる必要性によるものだったといわれる。

こうした経緯をみると、大学も含めて四月を学年暦の開始時にしたのは、官僚制度の便宜的な都合といえる。私は、「日本の諸制度は、戦時総力戦体制下の一九四〇年ごろに導入されたものが多い」という「一九四〇年体制論」を唱えているのだが、学年暦に関しては、それよりだいぶ前から官僚主導・戦時体制がとられていたわけだ。

九月新年度の利点と欠点

では、もし、年度の開始時をフリーハンドで決められるとすれば、何月にするのが合理的だ

らうか？

北半球では、四月は春であり、生物の活動開始期だ。したがって、ここを年度の開始月とするのは、ごく自然と思われる。農作業の年間スケジュールも、春が起点になる。四月新年度開始というのは、こうした事情に合わせたものなのだろう。

予算編成作業のサイクルで、もし新年度の開始を秋にすると、予算編成の最終時期が六月ごろになる。これも大変だが、それから後の国会審議が七月八月になるのも大変だ。日本ではとうてい不可能な日程といえるだろう。

もう一つ、アメリカ方式だと、年度の呼び方に混乱が生じるおそれもある（アメリカでは二〇〇〇年一月一日から二〇〇一年九月三〇日までが二〇〇一年度なのだが、これを二〇〇〇年度と誤解する人がいるかもしれない）。

しかし、学年暦についてみると、九月開始が合理性を持っている面が多い。このスケジュールだと、卒業式は六月になる。欧米の多くの地で、六月は気持ちのよい時期だ。実際、これは「ジューン・ブライド」の月である。そして、暑い夏は学年間の長期休暇になる。気候が快適になったときに、新学期が始まるわけだ。

北半球の場合、日本式の年度だと、新年度が始まってすぐに、行楽の時期になる。ここはどいうしても休みたくなる。そしてしばらくすると、夏休みになる。走り出したとたんに休止があり、しばらくすると大休止があるので、ペース配分が乱される。これに対して、欧米式だと新年度から進むにしたがって、勉学に適した時期になってゆく。こう考えると、知的作業にと

つては、(北半球では)九月始まりのほうが合理的なように思われる。

もっとも、以上は、年度開始後のスケジュールを重視した場合である。新年度のための準備スケジュールを考えると、別の事情が発生する。新学期開始が秋だと、夏が受験の最終追い込み期になる。酷暑のなかでの受験は、難儀だ。久米正雄の時代の受験生は、さぞ大変だったろう。日本のように入学試験が非常に重要な意味を持つ国では、いかにエアコンが普及した現代でも、九月新学期はむずかしいような気もする。

しかし、これは、「入学試験が重要」ということを大前提にした場合の結論である。「この前提自体が一九四〇年体制的だ」という見方もできる。実際、アメリカの大学のように、入学試験を行なわないか、あるいはきわめて緩いものとし、入学後に厳しい選別を行なうという方式にすれば、事態はかなり変わる。

年度変更が構造改革の第一歩

このように、年度の区切りは、制度の運用法と密接にかかわる問題なのである。決して真空中では議論できない問題だ。運用の基本が変われば、年度の適切な区切りも変わる。

この考えを押し進めれば、「学年暦のあり方が、学校制度の基本を変える」ともいえる。そうであれば、年度設定の問題は、決して便宜的には考えられない。むしろ、制度の根幹を左右する重要な戦略的要素として重視すべきだということになる。

たとえば、新学期を九月に設定すれば、大学であっても高校であっても、学生の国際交流は

やりやすくなるだろう。したがって、「国際交流」が、その学校の特色となるに違いない。他方、すでに述べたように、入学選抜を行なう時期が夏になることから、従来タイプの筆記試験方式はとりにくくなる。したがって、アメリカのように入学後の成績評価によって学生を評価してゆく方式に変わってゆくだろう。

事務処理の面でも、変化がありうる。国立大学は国の予算の会計年度区分に振り回されているが、もし会計年度がずれば、自主性が高まるはずだ。さらに、予算制度そのものの改革にもつながるかもしれない。

このように、学年暦を変えることが、大学の性格や構造を変えてゆくのである。逆にいえば、学年暦の一律化こそが、日本の学校から個性を奪っている元凶なのだ。

「学年暦が学校によつてばらばらだと、学生には不便だ」との意見があるかもしれない。しかし現在でも、大学入試の時期は、学校によつて若干の差がある。それは数週間の差でしかないが、そのことが受験生の質に微妙な差をもたらしている。さらに、大学院入試は、春に行なうところと、夏に行なうところがある。

もっとも、現在では、「難易度の高い学校が早い時期に入試を行ない、そこで落ちた学生を遅れて入試を行なう学校が拾う」という、受動的でネガティブな側面が強い。しかし、入試時期の差は、もっと積極的に活用することもできる。そして、時期にもっと大きな差をつけてもよい。さらに、新学期開始の時期さえ異なってもよい。特に社会人大学院は、他校より大きく異なる学年暦でもよいわけだ。それをセールスポイントとすることもできる。

「入試時期や入学時期は統一されていなければならない」という考えこそが、集団主義、画一主義の象徴なのである。センター試験のように、スケジュールが同一であるばかりでなく、実施要領の細部にいたるまで厳密に統一化された試験を全国一律に行なうというのは、不自然であり、異常である。「国内では見事に統一化されているが、国際標準からは著しくずれている」というのが、「一九四〇年体制」の特徴だ。

企業の採用時期についても、同様のことがいえる。採用時期を企業間で統一化するというのは、国内校の新卒者採用を前提にしているからである。もし、中途採用者の比率が増えてゆけば、採用時期の統一化は不必要になる。また、外国の大学の卒業生を対象とするのであれば、やはり不必要になる。もし日本国内の大学や大学院の卒業時期が分散化してくれば、やはり不必要になる。

そして、採用時期の違いによって、その企業の人材の質が変わってくるだろう。その差は、ひいては、企業の基本的な性格を変えてゆくだろう。つまり、この面においても、採用の年度サイクルの設定が、企業の構造改革を引き起こしてゆくのだ。

構造改革は、「言うは易く、行なうは難い」課題である。それを現実のものとするには、有効な突破口を見出すことが必要だ。「新しい年度方式の採用」は、一見して迂遠に見えるだろうが、実は、最も強力な方法なのかもしれない。

01年4月14日号掲載

その後の展開

ここで提案した九月新学期制は、グローバルゼーションが進むにつれてますます必要になると思う。特に、大学や大学院ではそうである。学生が日本と欧米の大学（あるいは大学院）を移動しようとする、学年暦が食い違っているために、一年を無駄に過ごさなければならなくなってしまうことが多い。こうした問題に対処するため、私が勤務していた東京大学先端科学技術研究センターの大学院は、九月入学を通例としていた。ビジネススクール、ロースクールなど、専門的職業人のための大学院が成長すると、九月新学期制の必要性は高まる。しかし、この件に関しては、残念ながら「その後の展開」がない。

詳しく知るには

野口悠紀雄『一九四〇年体制 さらば「戦時経済」』、東洋経済新報社、一九九五年。

久米正雄『受験生の手記』、『学生時代』、新潮文庫。

June (六月) は、ローマ神話ジュピターの妻ジュノー (Juno) に由来する。彼女は結婚や家庭の守護神なので、「六月に結婚すると幸せになる」のだという。欧米では、六月が卒業式の月なので、学生生活を終えて直ちに結婚という場合には都合がよい。そのうえ気候が気持ちがいい季節だというのも、大きな理由だろう (日本では六月は雨の季節なので、「気持ちがよい」といわれても実感できないが)。

2 公務員倫理規程の愚と怖さ



国立大学教官の非倫理的行為とは

A 国立大学の教官が学生のコンパに無許可で出席し、歓談することは、倫理にもとる行為である。

B 国立大学の教官が、届け出なしに『週刊ダイヤモンド』誌にエッセイを寄稿するのは、